



ユニ総合計画の グリーンレポート

1級建築士 秋山英樹
不動産コンサルタント

9月号

発行日2011年9月

「東日本大震災の被災地を廻ってきました」

今月は仙台でセミナーがあったので、足を伸ばして仙台～石巻～女川～南三陸～気仙沼～陸前高田～大船渡～遠野と海岸沿いをレンタカーで廻ってきました。すでに行かれた方も多いと思いますが、建築専門家としての私の眼でお伝えしようと思います。

私が泊まった石巻も遠野も宿泊施設は建設業者の長期契約で予約を取るのは一苦労でした。気仙沼は漁業関係の大型倉庫などが多いせいかまだまだ片付けられていませんが、その他の地域では概ねガレキは片付けられ、広い土地が漠然と広がっていて、すでに報道にあったハエの大量発生や悪臭もなく雑草が茂り始めていました。解体が大変な基礎がそのままですから、今後地境の確定や基礎の解体と相当な時間を必要とすると思います。工事業者以外で被災地を歩き回っているのは私以外にはたまに会うだけで、多くのトラックに混じり時折大型バスが見学者を乗せて、大きな被災現場を中心に廻っています。

まず、仙台市郊外の折立団地を見ました。山の傾斜地に造成された100m×300m位の範囲の住宅地が斜面に沿って1～2m位の地滑りを起こしていました。地震の揺れが少なくとも長く続くと、平地の造成地では地盤の液状化、傾斜地の造成地では地滑りが発生しやすいのです。隣接する住宅地は無被害なのにこの地域だけ大惨事です。これはナダレと同じ原理（解けた硬い雪の上に新たに雪が積もると滑りナダレになる）で、表土の下に粘土層などがあると境で地滑りを起こしやすいのです。40年以上も前の造成地ですが造成地のリスクが表面化した例でした。



写真は石巻の海辺近くで、津波の高さは3m位で、津波に遭遇した被災地は鉄筋コンクリート造やわずか残った木造を除いてほとんどは無くなっています



駅近くは津波も40cm程度で津波被害はなく、地震により倒壊した建物はほとんどなく、それは他の地域でも同じで震度6弱では建物の一部が壊れても

倒壊に至る建物はなかったようです。今回の地震は周期が0.2～0.3秒の短周期の揺れが多く被害が少なかったのです。また、写真のように土蔵や寺院などの伝統建築が残っていたのも印象的でした。寺院の本堂は壁が少なく、津波で建具が流され柱だけのスカスカになったため津波による倒壊を免れた様子でした。



次に、建築的に衝撃的なのは、女川でした。津波は海辺近くでも12m以上はあったそうで、鉄骨造の建物だけでなく、重量のある鉄筋コンクリート造も津波の力で、押し倒されていました。



建物の底を見ると杭と基礎がしっかりと繋がれていなかったのも原因と考えられます。



気仙沼では、漁港のほとんどの建物が鉄骨造でALC板やスレート板などの外壁であったため、多くの建物で1～2階の外壁や内部が壊れてしまいましたが、構造体そのものは使用できるように思えました。地震で弱いのが構造体より外壁など二次部材といわれるのですが、津波では逆に壊れたために構造体の崩壊は免れたと推測できる建物が多く存在していました。



今回廻ってみて感じたのは、どこも地盤が下がったため道路は水びたしであったり、地滑りがあったり、建物もさることながら地盤がどうなのかが震災被害の大小に影響するという、伝統建築が一般に言われているより地震に強いということでした。

今後の被災地の復興を切に願っております。